

## ばかむこはん（垂水区）

ばかむこはんの話をしようかい。ばかむこはんがおつてのう。いや、はじめから、ばかむこはんではなかった。よめをもらったときから、むこさんになった。それで、ばかむこはんという。

ばかむこはんは、よめの里へいった。初めての里入りやった。初めて、むこどのが来るっちゅうんで、よめの里では、朝からもう、ごちそうのこしらえや、むこどのに持たせてかえすみやげの準備やらで、戦争のようないそがしさであった。

よめの里には、よめの兄が、その家のあとつぎをしていた。兄夫婦にも、幼い子どもが二人いた。

よめの里には、よめの両親（りょうおや）もいたが、むこどのがくるといふもんで、ゆんべから孫のことなどほったらかしで、ただもう、うきうき、おろおろしているばかりであった。

ばかむこはんは、朝からごちそうげめで、もう満腹やった。満ちたりてみると、そぞろ、まちに残してきたかわいい嫁がこいしくてならぬ。今はもう、一ときでも早く帰って、ぶじな嫁の姿を見たいもんだと考えておつた。

里のふた親はひきとめても、むだだと知ると、むこどのに、おいしいあんもちを持たせてやろうと考えた。そこでよめの里では、もちをつき始めた。

ばかむこどのは、もう気が気でない。何を作ってくれるかは知らぬが、家の者が集ってひそひそ相談したり、あやしげな音がきこえたりするのが、何だか気味わるく思われてきた。

そのうち、この家の孫たちが、もちつきのそばにきて、もちをつかむやら、うすをいらうやらで、邪魔（じゃま）になって仕方がない。

「これこれ、これはオトチ（おぼけ）だから、さわってはいかん。あっちへいきな。」

ばかむこはんは、これを聞いて考えこんでしまった。

先ほどから、妙にひそひそ声（こゑ）がした。へんな音もした。何をみやげにしてくれるのかと思っていたら、やっぱりあれは「オトチ」ではないか。たいへんなことになってしもうた、とばかむこはんは思案（しあん）にくれた。

もちがつきあがり、やがて、ばかむこはんが帰るだんになると、ばかむこはんはいうた。

「へんなことをいうてすまんが、青竹の長いのを一本おくれんか。」

ばかむこはんの声は、すこし上ずっておつた。

「おやすいこと、何につかうか知らんが、いますぐ切ってくるで。」

裏には竹やぶがあった。家の者は、さっそく青竹のすぐい、長いのをえらんで切ってきた。

「ちいとすまんが、その先にオトチとやらをくりつけてもらえんか。」

ばかむこはんは、里の親からもらった大きな風呂敷包みを、この長い竹ざおの、いちばんてっぺんにぎゅとしぼりつけてもろうた。すると、すこしは心（こゝろ）がかるくなった。

山里の日は、落ちるのが早い。

里の人びとにわかれをつけると、あたりはもう夕（ゆふ）やみであった。

ばかむこはんは、生きた心地もない。今竹ざおの先には、こわい「オトチ」がいる。かたくしぼってはいるものの、いつ、さおをつたっておりて来、わしの首すじにかぶりつくかも知れぬ。そう思うだけで冷汗（あせ）がにじんできた。

こわい、こわいという思いが先だって、包みの重さはいっこうに苦（くる）ならぬ。いまはもう、いつときも早く嫁（よめ）に会って、「オトチ」を退治（たいぢ）してもらうしか、みちがないと心に決めていた。

山道は、いたるところで、小さな流れが道を横切っている。長い竹ざおの、根もとの方を、おそろおそろかつぎあげているばかむこはんは、この小さな流れは針（はり）の山のように思われた。

やっと山道も終わろうとするころ、ばかむこはん、心がゆるんでいたのか、流れをひよいととびこした。とびこしたひょうしに、包みがするするとさおをつたって、ばかむこはんの首すじへ。

ちょうど、重箱（じゆうげい）のふたがねじれて、中からはみ出したあんもちが、ばかむこはんの首すじにべたっとくっついた。

「たすけてくれーっ。」

オトチにくいつかれたばかむこはん、包みを投げ出すと、手に持った竹ざおで、めったやたらにつきまわして、そのまま、いちもくさんに逃げ帰った。

翌朝、よめがオトチに会いにいってみると、重箱も、なかのあんもちも、どろまみれになって、おまけに、重ねた箱のあいだから、あんもちがにゅっと舌を出していたということやった。

